

# ウェルウォーク通信

日頃はウェルウォークをご活用いただきまして誠にありがとうございます。  
 今後は導入施設様のウェルウォークご使用状況をご紹介しますので、臨床にお役立ていただければ幸いです。  
 それでは第1回目の今回は、西宮協立リハビリテーション病院様（兵庫県）をご紹介します。

## 西宮協立リハビリテーション病院



### 【施設の特色】

法人内に急性期の西宮協立脳神経外科病院と維持期・生活期のデイケア施設を2施設および、訪問看護ステーションを1事業所持ち、地域に根付いた医療・介護・福祉サービスの提供を行っています。

### 【基本情報】

病床数	回リハ120床
脳血管疾患患者	約6割
平均在院日数	約76日
療法士	91名 (PT43,OT32,ST16)
リハ単位(スタッフ1人あたり)	18単位/日

### ■ WWの活用状況（WW:ウェルウォーク）

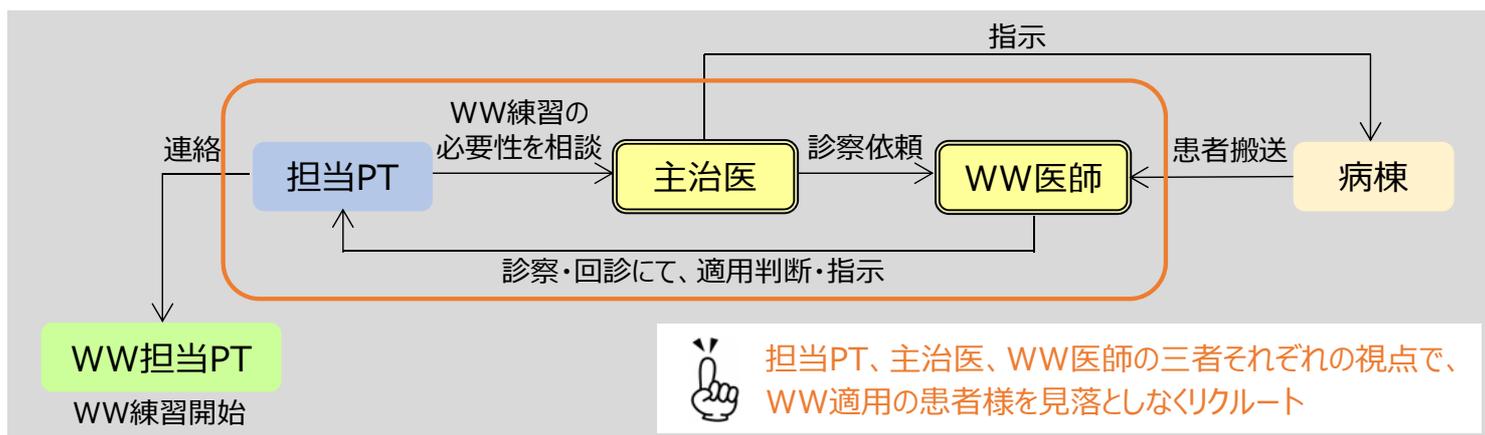
※2020年5月時点

WW運用	導入期間	平均練習患者数	平均練習週数	WW操作可能人数	WW練習単位数
	2年6ヶ月	約6名/日★	約9週	17名 (1人で操作可能)	2~3単位/日・人

西宮協立リハビリテーション病院様では、**1日の平均練習患者数が約6名**と積極的にWWをご活用いただいているようです。どのような運用体制でWWをご活用いただいているのか、お話を伺ってきたいと思います。

### Q1. 貴院ではWWを活用するにあたり、どのような運用体制をとっていますか？

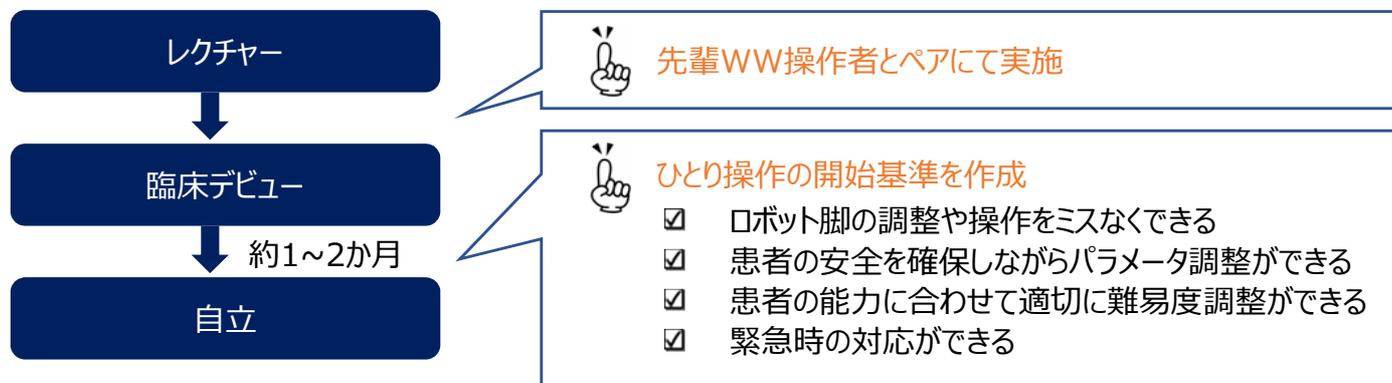
A. 適用判断や指示をおこなう**医師の理解、協力が不可欠**だと考えており、当院では**主治医・WW医師を軸とした連携体制**を整えています。当院の場合、WW医師が主治医に対して積極的にWW練習を提案したり、担当PTからも主治医に対してWW練習の必要性を相談・提案しやすい環境を整えるなどして、**患者様のリクルートを漏れなく行える**ようにしています。また、WW運用のフローチャートを作成し、看護師も含む協力体制を見える化することで院内連携を強化しました。



担当PT、主治医、WW医師の三者それぞれの視点で、  
WW適用の患者様を見落としなくリクルート

## Q2. 貴院では、どのような教育体制によってWW操作が可能な人数を増やしていますか？

A. 当院では、全スタッフがWW操作可能になることを目標に、リーダーPTによる**レクチャー**⇒**臨床デビュー**⇒**自立**という流れに沿った教育体制を整えています。病棟ごとにWWの指導係を決め、初日の練習や重度の症例の場合には担当PTと指導係の2名体制で治療するなど、**臨床現場でのサポートもしっかりと行うこと**により、担当PTが自信を持ってWWを使えるようにしています。また、**ひとりでWWを使えるようになるための基準を設け**、指導係が随時チェックするようにしています。現在では操作可能者17人全員がひとり運用可能という状況でWWを積極的に活用しています。教育を受けた者だけがWWを使えるという条件がWW活用の動機付けにもなっています。



## Q3. 1日により多くの患者様にWW練習を実施するために工夫されていることはありますか？

A. 当院では、療法士が1日の業務の中で効率よくWW練習を担当できるよう**患者様のスケジュール調整を工夫**しています。基本的に毎日同じ時間に同じ患者様がWW練習をするようスケジュールを組んでおり、その際に可能な範囲で①②、④⑤の時間は使用する**ロボット脚が左右交互になるように患者様の順序を調整**しています。それにより、脚調整を事前に済ませることができ、直前の準備時間を省くことで空いた時間を効率的に活用することができています。

### ■ 1週間の予定表 (例)

	日	月	火	水	木	金	土
A様、B様分の脚調整							
① 9:00-	A 様	→	→	→	→	→	→
② 10:00-	B 様	→	→	→	→	→	→
③ 11:00-	C 様	→	→	→	→	→	→
D様、E様分の脚調整							
④ 13:00-	D 様	→	→	→	→	→	→
⑤ 14:00-	E 様	→	→	→	→	→	→
⑥ 15:00-	F 様	→	→	→	→	→	→
⑦ 16:00-	G 様	→	→	→	→	→	→
@16:50-	新患フィッティング						

脚調整・患者送迎	5分
装着	5分
歩行練習	30分
日報入力 or 他のリハを担当	20分

※1人の患者様に対して1~2単位にて算定

脚の左右を調整することにより、脚調整の効率化を図る

タイムスケジュール

### 【担当の先生からの一言】

WWを導入して2年半ほど使用してきましたが、以下のポイントをメリットとして強く感じています。

- ◇ 紹介元となる地域の急性期病院や回復期に転院を考えている患者・家族に対して、アピールポイントになる
  - ◇ WWによる歩行練習において、疲労感を訴える患者が少なく、運動量・歩行距離を稼ぐことができる
  - ◇ 重症患者でも安全面に配慮した上で早期から歩行練習を行うことができ、病棟ADLの自立度が高まる
  - ◇ 運動学習理論について、導入前よりも深く考えるようになり、理学・作業療法プログラム立案再考の良い機会となった
- 今後も多くの患者様により効果的なリハビリを提供できるよう、積極的にWWを活用していきたいと思っています。